

先人に学ぶ 柔道整復

湯浅 有希子

柔整師として自らのルーツをどう説明しているのか分からない——こんな悩みを持ったことはありませんか。実はこれが、私が柔道整復の歴史研究を始めた理由です。3年前より早稲田大学大学院で研究を進め、その成果として、昨年、歴史書『柔道整復師—接骨術の西洋医学化と国家資格への歩み』を刊行しました。本欄では、拙著でも取り上げた、現在の柔道整復の基礎を築いた先人たちに焦点を絞り、歴史を振り返りま

す。多くの柔整師の先生方が自らのルーツをひも解く一助となれば、本望です。

◇ ◇
1 回目は、柔道接骨術公認期成会（期成会）の会長であった竹岡宇三郎（1865—1926）。期成会が結成された時代というと、明治新政府が1874（明治7）年に医制を制定し、日本の医療の西洋化を目指しました。1885（明治18）年には「入歯歯抜口中療治接骨営業者取締方」により医師を除き接骨業の新規開業が禁止。これに対し、一部の接骨家により期成会が結成され、我が国固有の接骨術を法的に認めるよう帝国議会に請願する運動が起ります。
まず、柔術家、接骨家としての宇

竹岡宇三郎「柔道接骨術公認期成会の会長で、一日三百数十名が来院する接骨家」（前編）

三郎の人物像にも触れておきます。飯盛和助氏の次男として、埼玉県北葛飾郡杉戸町に生まれました。その後、飯盛家を出て竹岡姓を継ぎ、13歳の時、「男子事を成す豊一小天地に齷齪して何をかせん」と郷里を飛び出して、当時、東京で天神真楊流柔術家の磯又右衛門の道場に入門して研鑽を積みまます。磯の没後は、彼の門下へ3年間にわたり教授し、1891（明治24）年に独立して日本橋蛸殻町に道場を開きます。

一方で「従来接骨業」の免許者であり、接骨家としても名声を上げます。施術を請う患者が多数訪れ、最盛期には「一日三百数十名の患者」が来院したとか。いわゆる竹岡式の接骨術の名は医療界で評判となりました。東京市長の阪谷男爵一家、渋沢子爵の一門をはじめ、政財界の有名人士などからも慕われ、相撲界では常陸山（当時の出羽ノ海）、横綱の常ノ花などもよく来院したようです。また、『竹岡式接骨術』をまとめた前田勘太夫は宇三郎の高弟で、兄弟の尚夫、武郷（東京柔道整復専門学校の創始メンバー）とともに柔道家であり、第一回柔道整復術試験の合格者です。宇三郎の精神は、今日の柔整師の礎となつていともいえます。

宇三郎は1913（大正2）年、期成会が組織された際、会長として接骨の法制化に尽力します。この運動により接骨は柔道整復として1920（大正9）年に内務省令により公認の許可を得ることとなります。